

西園寺公望旧蔵の俳書

——付陶庵不讀発句抄——

小林 孔

立命館大学図書館西園寺文庫所蔵の和装本の中で、ひときわ目をひく書冊群に西園寺家伝来の江戸期和歌御会資料、および歌集写本・版本があるが、これに次ぐ書冊資料群が俳諧、俳句の写本・版本である。本稿はこれら俳諧、俳句に関する書籍（以下俳書とする）の和装本について調べたところを報告する。

さて、西園寺文庫の沿革については、『立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録』（一九九〇年一〇月・立命館大学図書館）の衣笠安喜氏の『西園寺文庫目録』刊行にあたって「が簡にして最も要を得ている。これによれば、西園寺公望の生前に三度図書の寄贈がなされたという。大正十四年、立命館文庫設立を記念して英・仏書一八〇冊の寄贈、次いで昭和六年に和漢書三〇〇冊、さらに昭和十五年、死去の半年前に和漢書六六七一冊の寄贈である。ちなみに、西園寺文庫の創設は昭和十三年のことである。以来、これらの寄贈図書・資料に加えて中川小十郎旧蔵本、大学が補充、購入した図書・資料によって今日の西園寺文庫が構成されている。同氏の分類に従えば、西園寺文庫は、

西園寺家伝来のもの

公望自身が買い求めたもの

公望が献本、贈呈をうけたもの

大学が補充、購入したもの

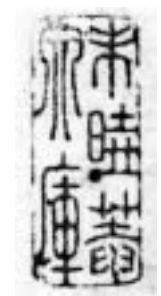
の四つに大別される。

俳書のうちで最も多いものは、大学が補充、購入した図書・資料で、おそらくその大半が中川小十郎の旧蔵本であろう。江戸・明治期の類題集、撰集、季寄せ等、広範な蒐集が目される。また、分類の西園寺家伝来の俳書は、ごく少数にとどまるものと思われる（公望入手の特定できない俳諧秘伝書の写本にわずかながらその可能性があるが、他の蔵書との傾向、関連性から考えて、公望入手の俳書と考えた方がよいと思う）。問題は表題に掲げた公望旧蔵の俳書とである。

一 公望入手の古俳書

西園寺公望が購入したとする確たる証拠は残念ながら求め得ないが、知己などを介して入手したと推定される俳書がある。それは【図版】に示した「未曉庵」（陰刻・陽刻の二種）ないしは「未曉庵文庫」（陽刻）の印を捺す同一旧蔵者の想定されるもので、中には古俳書の珍本も含まれている。おそらくこの蔵書印は、「未曉庵」を名乗った尾張の俳人大木静處のもので、俳書、墨蹟資料のかなりの蒐集家であつたらしい。筆者架蔵の嵐雪の「小槌画賛」扇面一点も同人の旧蔵品としての証拠がある。ちなみに、鬼頭素朗・伊藤亮三共著『尾張俳人考』（昭和十五年十一月・奎星社）の立項する記載内容の一部を摘記すれば、

【図版】



未曉庵（陰刻） 縦一・〇糎×横二・〇糎
 未曉庵（陽刻） 縦二・六糎×横一・六糎
 未曉庵文庫 縦三・〇糎×横一・二糎

號 未曉庵・沙流・量湖 通稱 左門・貞次郎・菱屋重次郎

生地 春日井郡西枇杷島六軒町

生 文政十一年七月十三日

歿 明治二十五年九月十六日 年 六十五

師承 芝石（俳諧）、渡邊周溪（畫）、柳澤維賢（書）

備考 世々農にして商を兼ね、苗字帶刀の家柄、性恬淡清靜、風雅を好み、常に書畫珍籍、古器を愛し、暇ある時は凡海内の勝地舊蹟往て訪はざるなし。

とあり、静處三回忌追善集『不昧集』（明治二十七年夏羽洲序）の双橋園秀石の跋にもはやく、

先師未曉庵静處翁は大木氏、通称重次郎、幼名を左門又貞次郎といふ。文政十一年七月十三日名古屋城西琵琶橋畔の家に生れたまへり……風流の志し篤く帯月菴芝石叟の門に入り……はじめ俳号を沙流、また量湖と呼び、後に未曉庵静處と改められぬ。長ずるに随ひ

西園寺公望旧蔵の俳書

深く正風の蘊奥を窮め……海内の勝地名蹟殆ど杖を曳かれ……うづ高く和漢の書畫珍籍古窯奇器くさぐさをも樂み、六十有五の歳月さらく笑みをふくまざるはなかりき。

と符合する記述が見られ（むしろ所伝の要点は、この『不昧集』の跋文を出典とするのであろう）、おおよその人となりとが確認できよう。ただし、静處の歿年が明治二十五年であり、通説（竹越與三郎著『陶庵公』・昭和五年二月・叢文閣ほか。出所はおそらく公望自身の執筆した『羽洲発句集』の明治四十二年十一月三日の序文からであらう）に従えば、公望の俳諧への関心が大磯居住を機に、その地で出会った間宮宇山との交流以降に芽生えたとしていられるから、静處との直接の交渉から、蔵書の一部を入手したと見るのは非常に難しいことになる。むしろ両者の接点はなかったと考えるのがより現実的ではないだろうか。

なお、大木静處の旧蔵本は、その歿後四散し、一部が古俳書蒐集家の竹内琴涯の手に落ちたようである（『文学堂書店古書目録』第23号・平成十一年初冬所収の『華摘』、『尾張の俳諧』名古屋博物館資料図版目録3・二〇〇二年一〇月所収『口笛集』、原本未見）。これと同様に、またその一部の古俳書は他の人物の手にわたり、それがやがて西園寺公望の所蔵本になったのであろう。

ここに、大木静處旧蔵本で後に公望が入手することになった古俳書十七点を紹介しておくことにしよう。数のうえでは少量だが、先にもふれたとおり、中には古俳書中の珍本も含まれている。西園寺文庫の資料番号の若い順に通し番号を付けて書誌を簡単に記す。

1、資料番号（2183）

去来抄 半紙本三冊（上・中・下）

安永四年^{乙未}三月

皇都書林 井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

備考 印記「未曉庵」(陽刻)

表紙の付箋番号「第百八拾□」

2、資料番号(2198)

増山井 半紙本一冊

安永三年甲午春正月再版

日本橋新右衛門町 戸倉屋喜兵衛

備考 印記「未曉庵文庫」・付箋番号なし。

3、資料番号(2236)

こがらし集 半紙本一冊

書林 京麩屋町三条上ル丁

勝田吉兵衛梓

備考 青阿編・寛政五年刊。

替表紙に元題簽を貼る改装本。

印記「未曉庵文庫」・付箋番号なし。

4、資料番号(2261)

おくのほそ道 升形本一冊

京寺二条上ル町

井筒屋庄兵衛板

備考 元禄初版のやや後印本。

印記「未曉庵」(陽刻)

表紙の付箋番号「第百七拾番」

5、資料番号(2270)

^{譜併}深川 半紙本一冊

京寺町二条上ル町

井筒屋庄兵衛板

備考 替表紙に元題簽を貼る改装本だが、元禄六年の初刷本と推定

される。

印記「未曉庵文庫」・付箋番号なし。

6、資料番号(2274)

三足猿 半紙本一冊

京寺町二条上ル丁

井筒屋庄兵衛板

備考 後印本。

印記「未曉庵文庫」

表紙の付箋番号「第百六拾□」

7、資料番号(2276)

つきよの北 半紙本一冊(欠乾卷一冊)

京寺町二条上ル町

井筒屋庄兵衛板

備考 下巻一冊。

印記「未曉庵文庫」・付箋番号なし。

8、資料番号(2280)

去来発句集 半紙本一冊

備考 刊記なし。

印記「未曉庵」(陽刻)

表紙の付箋番号「第貳百廿□」

9、資料番号(2281)

丈草発句集 半紙本一冊

安永三年六月翠栲堂

蕉門書林 井筒屋庄兵衛

橘屋 治兵衛 板行

備考 8の去来発句集と二冊の同時刊行。

印記「未曉庵」(陽刻)

表紙の付箋番号「第貳百拾九□」

10、資料番号(2288)

別座鋪 半紙本一冊

俳諧書林

花洛寺町二条下

橘屋治兵衛梓

備考 再版本。

印記「未曉庵文庫」

表紙の付箋番号「第百八拾□」

11、資料番号(2289)

續みなし栗 半紙本二冊(甲・乙)

西園寺公望旧蔵の俳書

貞享丁卯歳霜月仲三日

皇都書林

京堀川通錦小路上ル町

西村市郎右衛門蔵版

備考 後印本。替表紙の改装本。

印記「未曉庵文庫」・付箋番号なし。

12、資料番号(2310)

士朗五七集 小本五冊

書肆 尾張名古屋本町七丁目

永楽屋東四郎

備考 印記「未曉庵文庫」・付箋番号なし。

13、資料番号(2347)

訂正 蒼虬翁句集 半紙本二冊(上・下)

弘化四年正月

京寺町四条下ル町

山城屋佐兵衛

同 二条堺町西入町

林 芳兵衛

大阪心齋橋筋博労町

河内屋茂兵衛

紀若山新通二丁目

帯屋伊兵衛

備考 上巻見返しに「京都書林 林芳兵衛製本正記」の朱印。

印記「未曉庵文庫」

表紙の付箋番号「第貳百四拾□」

14、資料番号(2353)

沙鷗発句集 半紙本一冊

書肆 尾州名古屋本町一丁目

風月堂孫助

同 本町四丁目

晴月堂宇兵衛

備考 鳳文撰・弘化_二晩秋_一(見返し)

印記「未曉庵」(陰刻)

表紙の付箋番号「第貳百三拾三□」

後表紙見返しに次のような本書の伝来を記した付箋を貼付する。

「此集末十一月十七日芹舎_ゝ庭雅へ渡りノ車友_ゝ申七月二日拙者が請取申候」(二行書)

15、資料番号(2356)

^{補増}方圓発句集 半紙本二冊

書林 心斎橋通本町角

河内屋藤兵衛外八軒

印記「未曉庵文庫」

表紙の付箋番号「第貳百三拾九番」

16、資料番号(2491)

蒼山発句集 半紙本一冊

明治五年壬申孟夏

古木庵蔵

印記「未曉庵文庫」・付箋番号なし。

17、資料番号(2646)

^{芭蕉翁}奥細道拾遺 升形本一冊

延享甲子林鐘

洛陽蕉門書林

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

印記「未曉庵文庫」

表紙の付箋番号「第百七拾□」

右には資料番号、書名(題簽による)書型、冊数、奥付、刊記をとり、備考に旧蔵印の別、表紙に現存する付箋による旧蔵番号を記した。また、必要に応じて記載事項、所見を加えた。なお、旧蔵者の付箋番号に空白が記されているのは、現在の所蔵ラベルが上に貼られて判読を邪魔しているためである。

さて、付箋番号によって「第貳百四拾□」が確認されるから、その所蔵点数も和漢書を含めて膨大なものであったと想像される。いま、ここに「所蔵点数」と記したが、これは、たとえば三冊本の場合、第一冊目にのみ所蔵番号を付けていた旧蔵者の分類形態(おそらくこれが一般的な方法であろう)にもとづいている。右の書目の『去来抄』によってもこの点は明らかだが、書目番号7の『うきよの北』に旧蔵付箋番号を欠くのは、乾・坤二冊のうちの「坤」のみが現存するためであろう。また、替表紙の場合は、旧蔵の付箋番号の付いた元表紙がないからで、現在の私見は、大木静處の数字の筆蹟(『閑古鳥』・明治十二年七月自跋の版下文字等)と照合して、ほぼ付箋番号を同人のものと判断して矛盾のないも

【図版】



のと考えている【図版】は『おくのほそ道』表紙右下に貼付されている付箋番号。なお、書目中に記した14『沙鷗発句集』の後表紙見返しに

「此集末十一月十七日

芹舎庭雅へ渡り、車友申七月二日拙者が請取申候」とある付箋（静處の自筆であろう）によれば、この『沙鷗発句集』は明治四年（庭雅の歿年から推定）十一月十七日、京の八木芹舎から尾張の庭雅へ、さらに同じ尾張の織田車友から明治五年七月二日に旧蔵者大木静處へとわたった事情が判明する。その『沙鷗発句集』に「第貳百三拾三」の番号が与えられているところから考えると、所蔵本を整理し、分類の番号が付けられたのは明治五年の七月以降のことと推測される。未曉庵文庫の旧蔵本でありながら、元表紙をもつ16『蒼山発句集』などに付箋番号を欠くのは、分類、整理後の入手だったのであろうか。別に何らかの事情（古俳書ではない等）によるものと考えはしない。

さて、今日、大木静處と西園寺公望とを直接結びつける資料を管見の範囲では見出し得ないが、ここにある人物を紹介することによって静處から公望への蔵書移動が現実的なものとなってくる。先にもふれた静處の追善集『不昧集』に序を寄せ、その中で「をさな友達」と回想し、同じ芝石門の俳人でもあった松浦羽洲（文政九年～大正三年十二月二十三日、享年八十八）その人である。

羽洲については『陶庵公』（既出）の「公の文藻と趣味」や『陶庵素描』（安藤徳器・昭和十一年七月・新英社）の記事に見えるように、公望の俳諧の師匠筋にあたる人物で、ここに再び『尾張俳人考』を繙けば、

尾藩御用達宮戸九兵衛男、十七歳の時祖母の實家を継ぎ、名古屋東萬町住、古着商、頗る資産に富み、名古屋東魚町に新築す、性洒落にして清廉、俳壇に力を盡し、遠近俳流の門下多く西園寺陶庵公の如きも其教を受けしことあり、又謠曲を能くす。

とあるから、その交流を裏づける資料については逐一挙げる必要もないだろう。ちなみに西園寺文庫には、年次不明の六月十五日付羽洲宛不讀書簡一幅がある（『西園寺公望傳』「別巻一」・立命館大学編・一九九六年一月・岩波書店所収。他に八月卅日付羽洲宛書簡を収める）。

その松浦羽洲もまた『心月菴並某旧家所蔵品賣立目録』（名古屋美術倶楽部・昭和十四年十一月二十四日）にその旧蔵品として土芳筆歌仙幅（端作に「西の冬 東武蕉翁へ心見之一巻」とある元禄六年冬、芭蕉の許へとどけられた伊賀連衆、配力・雪芝・車来との四吟歌仙。学会未見の資料）が見えたり、芭蕉筆「花をやどに」等三句懷紙（現個人蔵）の旧蔵者（二重箱の内箱小口に「満都良蔵」の印のあるよし。筆者未見）として知られ、芭蕉、および蕉門の墨蹟資料蒐集家の一面を持っていた。自ら蕉門八世を名乗ったともいう。西園寺文庫にも公望がその師弟関係から直接入手（羽洲歿後の可能性もある）したことの確定できる古俳書三点があるが、それらには共通して【図版】に示した「満都良章」の蔵書印が捺されている。その俳書は、

【図版】

資料番号（2245）

○法印俳諧秘 半紙本一冊

寛保元年 西 歳文月下浣 東文写

東文の書写奥書「此書者元祖貞徳」貞室二



傳^フ貞室季吟^ニ傳^フ季吟^{ヨリ}濃之貞静軒^ニ傳授^ス其子六々庵^{ヨリ}愚受^レ之^ニによれば六々庵太田巴静所持本からの転写本で、『^{季吟家廿五箇条}』の伝書を著した巴静の種本の内容に相当するものと思われる興味深い一本である。

資料番号(2286)

○有磯海 半紙本一冊 (浪化集上)

替表紙の改装本。

資料番号(2287)

○となみ山 半紙本一冊 (浪化集下)

替表紙の改装本。

二冊一対。元禄八年井筒屋庄兵衛板。

であり、いずれも芭蕉に關係する秘伝書と蕉門の古俳書である。羽洲の嗜好一斑が垣間見られようが、実のところこの傾向は、先に十七冊を書目として紹介した大木静處旧蔵本の一部とも合致するのである。

おそらく静處の旧蔵本の一部、とくに芭蕉および蕉門に關する俳書は、その歿後、旧友の羽洲の手にわたり、それがいつの頃か、羽洲の旧蔵本とともに公望の入手するところとなったと推定する。その中には尾張俳人の家集(個人句集)が含まれているが、公望が興味を示して静處の所蔵本を直接購入したというのではなく、むしろこれらの数点は、同郷の先人に追慕の念を抱いていた羽洲の手を経由した結果として、たまたま公望の入手するところとなったのであろう。そのような一度は羽洲の許へ移った静處旧蔵本に、なぜ、羽洲自身の蔵書印を捺さなかったのかという疑問も残るが、これは旧友の蔵書に対する配慮のあらわれでもあったのであろう。

なお、公望旧蔵の他の古俳書が、どのような入手の経路を辿ったものか、そのすべては明らかにし得ないが、想像するに、時折数点ないしは一点ずつ買いつけていったのではないだろうか。もちろん、羽洲など公望の俳諧での交流圏の誰彼によってもたらされた俳書もあったであろう。公望の旧蔵俳書の中には、

資料番号(2345)

○蒼虬翁俳諧集(蒼虬翁俳諧附合集)

の上巻に「相州大磯嶋立菴知事」(間宮宇山蔵)の印を捺す伝来のはっきりしたものも含まれるが、このたびは入手経路の想定される古俳書の一群について報告をし、他は追跡調査のおよばなかった蔵書印を含めて後考を俟ちたいと思う。

二 公望への献呈本

明治・大正期の旧派の俳書は、より一層私家の配り本の様相を濃くするが、このような俳書の扉に、公望はしばしば題字や一筆の揮毫を依頼されたようである。俳書の巻頭(扉)に書家、高僧などが文字の揮毫をする例は、決してこの時期に始まったことではないが、いわゆる権威づけのひとつとしてしばしば用いられた形態である。公望の名声に便乗して俳書を権威づけたのであろうか。公望も依頼されれば、こころよく書の腕をふるったのであろう。西園寺文庫の俳書の中ではとくに近代の旧派俳書の一群に、このような編著者から返礼として贈られた献呈本をいくつも見ることができる。また、発句(俳諧用語で近代ではあまり用いないが、公望の嗜好を考慮して以下この語で統一する)を望まれて一句を呈し

たものや、いつさい何らかのかわりを持たない場合でも、知己などを介して献本されることもあったようである。つまり、公望への献呈本はおよそ

○ 巻頭の揮毫におよんだもの

○ 発句を載せたもの

○ 知己からの贈呈本

に分類されるであろう（公望が序文を草した『羽洲発句集』が二部当文庫に所蔵されている）。なお、正確にいうと、巻頭に揮毫をしたつえに一句を載せる俳書もあり、そのひとつひとつについて分類による書名一覧をここに掲載すべきであるが、このたびは巻頭の揮毫におよんだ俳書を列記しておくことにしよう（資料番号2380の『白黄菊』から2502『酔雨句集』までのうち、2381『水音集』、2395『俳諧明治新五百題』、2397『呉竹集』、2404『閑古集』、2405『波々曾紅葉』、2414〔俳句会寄書〕、2416『題詠俳諧明治千五百題』、2427『ふもとの花』、2428『つたふ松風』の九点については中川小十郎の旧蔵本）。記載にあたつては資料番号、書名、編著者名に絞ることにする（表記に一部修正を加えた）。

資料番号	書名	編著者
2387	『蓬萊』	荒木兔文 荒木北園
2396	『まつたけ集』	堀田楓陰
2421	『受来遺稿』	横山鶴処
2424	『雪のしづく』	松浦九一郎
2433	『居中遺稿』	横山章
2434	『奈良茶』	無名庵露城

西園寺公望旧蔵の俳書

2438	『あわのかげ』	古谷鼠堂 等
2440	『夜寒百韻』	庄司唸風 森山鳳羽
2441	『赤ますずり』	西尾其桃
2445	『高麗犬』	小川清美
2454	『老松集』	大熊文琪
2472	『残の雪』	前田伯志
2482	『鶴の子』	横山居中
2486	『尾川句集』	安藤忠治
2498	『唸風遺響』	庄司唸風
2500	『小々啼集』	渡辺招鸞

さて、西園寺公望に関する研究諸文献を通覧して、俳人公望、不讀を著した書物と量には、『陶庵隨筆』（國木田獨歩編・明治三十六年十月・新聲社）、前掲書『陶庵公』（竹越與三郎著）、『陶庵素描』（安藤徳器著）および、『園公秘話』（安藤徳器著・昭和十三年七月・育生社）程度の記事以上のものを見ない。そこで、試みとして陶庵不讀がどのような発句を作ったのか、それを西園寺文庫所蔵の献呈本から拾い出してみたいと思う。

〔凡例〕

序文などから推定される出版年次順を目安に、所収俳書名を添え、同時に献呈本三分類の書目の補足としておきたい。なお、発句には読みやすさの便を考えて私に濁点を補った。

陶庵不讀発句抄

- 印は現段階での初出句形。
- 印は初出句形に対する異形句。
- ▼ 印は同一句形。

○黄鳥や窓の朝日の和らかき

(『雪の松』・明治34・春日)

○寒いともけさはおもはじ初日の出

(『まつたけ集』・明治35)

○来る風も行かぜもある青田哉

(『ひと重げし』・明治36・仲夏)

○目のあたり梅ひときありけさの春

(『生の松』明治37・初春)

▼来る風もゆくかぜもある青田かな

(『すきかへし』^{六編}・明治37・3)

不讀・二道・其彭・羽洲四吟歌仙発句

○まだ咲ぬ花からそゝげ朝の雨

(『貞徳翁追遠集』・明治37・3)

○梅の咲く處を庵の恵方かな

(『残の雪』・明治39)

●梅のさくあたりは庵の恵方哉

(『あさくさ集』・明治40・春)

○霧まれて殊更白し嶺の花

(『うたかた集』・明治40)

○其まゝに雨とふりけり花の雲

(『花のかたみ』・明治40)

○ひと枝は梅も手折て子の日かな

(『研山筆海』・明治40)

○雪に見て買たくなりぬ人の庭

(『同座集』・明治41・3)

▼まだ咲ぬ花からそゝげ朝の雨

(『月花帖』・明治41)

▼ひと枝はつめも手折て子の日哉

(『蓬萊』明治42)

▼ひと枝は梅も手折て子の日かな

(『しまめぐり』・明治42・改旦)

●寒いともけさは思はず初がすみ

(『老松集』・明治42)

▼梅の咲あたりを庵の恵方かな

(『鶴の子』・明治42)

○ 鶯もまだ音をいれぬ筈根かな

(同右)

不讀・居中・羽洲・石芝・契外五吟歌仙発句

○ 初はるや何に添ても梅の花

(『真木ばしら』・明治42・春)

▼ はつ春や何に添ても梅の花

(『南山曲』・明治42・仲春)

○ 初月やふきかはわたる磯の風

(『ぬくめたね』^{二編}・明治42・晩春)

不讀・二道・羽洲・竹涯・其彭・左城六吟歌仙発句

○ 冬牡丹手折るもけふはをしからず

(『霜の暁』・明治42・中秋)

○ 御さがりや松の若きもひとげしき

(『あわのかげ』・明治43・4)

▼ 初はるや何に添ても梅の花

(『飛驒文臺』・明治43・5)

○ 葛咲てよしのゝ里を狭めけり

(『古枝集』・明治44・5)

○ 嶺々の名も誦んじて夜明哉

(『柳の影』・大正1・秋)

▼ ひと枝はつめも手折て子の日かな

(『若菜籠』・大正2・春)

▼ ひと枝は梅も手折て子の日かな

(『紅羅集』・大正2・春)

● まだ咲ぬ花からそゝげけさの雨

(『雪のしづく』・大正4・初冬)

● はつ雪に買たくなりぬ人の庭

(『うらの雪』・大正5・1)

○ 萬斛の珠をはき出す清水かな

(『若水』・大正5・春)

○ 逸物に一鞭くれて霜の原

(『奈良茶』・大正5・仲春)

▼ 雪に見て買たくなりぬ人の庭

(『雪の竹』・昭和2)

○ 桐咲て高殿たかく成にけり

(『蚊帳のねざめ』・昭和5)

● 鶯もまだ音を入れず箱根山

(『小春草』・昭和8・6)

年次不明

▼ 其まゝに雨と降り花の雲

(書名不明俳書 資料番号2462)

○ 垣越しに白帆見添へし牡丹かな

(『青白しふ』・乙由庵立机集)

明治三十八年と推定するが年次未詳

▼ ひと枝は梅も手折て子の日哉

(『はつね』・資料番号2442)

○ 柳吹かたへ漕行小舟かな

(写本『摘草』・資料番号2419)

不讀・宇山・羽洲三吟歌仙発句

● 初月や吹かはりたる磯の風

(同右)

▼ まだ咲ぬ花からそゝげ今朝の雨

(同右)

不讀・羽洲・培屋・浅水・二道五吟歌仙発句

▼ 梅の咲あたりを庵の恵方かな

(『富岳』・資料番号2402)

▼ はつ月や吹かはりたる磯の風

(書名不明俳書 資料番号2393)

松蔭寺白隠禪師旧跡

○ 寺旧りて名の有さつなさくら哉

(同右)

▼ 雪に見て買たくなりぬ人の庭

(同右)

現段階ではこれに『陶庵隨筆』・『陶庵公』・『陶庵素描』・『園公秘話』収載の発句で欠を補い、今後は遺漏の発句を一句ずつ拾いあげて徐々に補充されてゆくことを希望する。同じ発句が別の集に載る、言い換えれば旧作を他に用いる現象は、今日の新作主義の俳壇から見れば違和感の対象となるかも知れないが、江戸期からつづく俳諧史の流れの中に置いて見れば、決して異を挟むべき事柄ではないことを最後に申し添えておく。なお、題字などの巻頭揮毫、および入集俳書を右に一覧できるかたちをとったが、これ以外の俳書が知己などを介した贈呈本を考えるひとつの目安となるはずである。『西園寺文庫目録』と照合いただきたい。

〔付記〕

資料の閲覧および掲載に際しては、立命館大学図書館より格段の御高配を賜った。記して感謝申し上げる。

(大阪城南女子短期大学助教授)